【広報文化財コラム「一宮の歴史特集」】⑬

平成30年4月号

一宮町の歴史特集
「加納家と一宮」
①加納家と一宮のかかわり

2019年2月、元一宮町長で多大な功績を残した加納久宜公の没後100年を迎えます。今号から「加納家と一宮」と題したコラムを連載します。

一宮の発展のターニングポイントの一つとして一宮藩の成立が挙げられます。文政9年（1826）、伊勢国（現三重県）八田藩主の加納久儔（1797～1847）が一宮に陣屋を建設したことから、一宮藩が誕生しました。

そもそも加納家と一宮のかかわりはいつから始まったのでしょうか。

江戸幕府の8代将軍・徳川吉宗の側近・加納久通（1673～1748）は吉宗が紀州（現和歌山県）藩主だった頃からの家臣で、吉宗の将軍就任とともに幕府の中枢に列するようになります。その功績は大きく、享保11年（1726）に一宮本郷村を含んだ、上総国長柄郡などを与えられます。この時から加納家と一宮の関係は始まります。

当初、加納家の陣屋は伊勢国の八田にあったため、「伊勢八田藩」と呼ばれ、一宮地域はその所領の一つでした。その後、久堅、久周、久慎と代がかわり、先述したように久儔の代に一宮に陣屋が建設されて一宮藩となりました。

一宮藩成立後は、久徵、久恒とつづき久宜の時に明治維新を迎えます。歴代の藩主は多くのことを一宮にもたらしました。一宮の近世の発展は、加納家なしには語ることはできないのです。

▲「加納家系図」（「加納家史料」より、町教委所蔵）
一部抜粋、右に「久通」が見える。

【問合せ】教育課 ☎(42)1416

平成30年5月号

一宮町の歴史特集
「加納家と一宮」
②加納久宜と一宮町政

加納久宜は上総一宮藩最後の藩主で、晩年には一宮町長に就任、一宮の近代化・発展に大きく寄与した人物です。

町長に就任したのが、明治45年（1912）。退任が大正6年（1917）のため、その町政は約5年間のみでしたが、久宜は就任以前から一宮のために様々な活動をしていました。

町長就任以前の明治42年（1909）、久宜は時の町長・飯塚総十郎に「町是を定め置くべきの議」という提言書を提出します。

これは全14条（内容は13条分）に及ぶ当時の一宮町が採るべき政策をかかげたものです。それらを要約すると、①駅から海岸への道路の建設、②一宮川河口の改修、③松林の保護、④高級旅館の建設、⑤公園整備と洞庭湖の整備、⑥一宮川の桜の保護と整備、⑦農産物等を扱う組合の設立、⑧簡易図書室の設置、⑨一宮病院の設立、⑩一宮小学校に附属幼稚園を建設、⑪学校へ行く町民への補助、⑫物産品評会の開催による産業の振興、⑬街灯の設置、など教育・産業・観光・福祉に至る多種多様な政策が盛り込まれています。実際、この中には久宜がのちに実現したこと（一宮病院の設立など）もあります。

久宜はこの提言書の中で、自らの提言を「百年の長計」とし、一宮を「日本帝国の一ノ宮町たらしめる」ための政策である、としています。久宜は一宮の未来のため、自らの経験と知識を生かして積極的かつ精力的に、様々な問題に挑んでいたのです。

▲ 加納町長時代の一宮町役場（現観明寺境内、『一宮町史』より）

【問合せ】教育課 ☎(42)1416

【広報文化財コラム「一宮の歴史特集」】⑭

平成30年6月号

一宮町の歴史特集
「加納家と一宮」
③加納久朗と一宮町青年会

一宮町青年会は明治41年（1908）、義務教育後の青少年を中心に、社会人としての教養を社会教育することを目的として発足しました。初代会長には加納久宜の子で当時東京帝国大学（現東京大学）の学生だった久朗が就任しました。

青年会の事務所は観明寺裏の字矢倉前にあり、青年会・婦人会・農会の三団体の集会所として、「三会堂」と呼ばれたといいます。

青年会には様々な部がありました。植林経営を主とする「林業部」、梨、蜜柑などの果樹栽培で大きな利益を得た「園芸部」、養豚・養鶏を中心に行った「畜産部」、一宮川での蜆・鯉の養殖を行った「養魚部」、「兵事訓練部」、「商業部」など多種多様な活動を行っていました。

会長の久朗自身は学生だったこともあってか、直接一宮において、これらの事業に携わったことは確認できていません。しかし、近年発見された「斎藤家文書」の書簡から、当時副会長だった斎藤脩一（1889～1940）とともに、積極的に活動していたことがうかがい知ることが出来ます。

また、千葉県下において、青年会の存在は「一大団体」と紹介されており（明治44年、『地方資料小鑑』）、地方改良運動の先駆けとして評価されていました。

青年会はその後「一宮青年団」と名称を改称しますが、戦争に突入すると、活動は停滞。戦後の昭和26年（1951）に一宮青年クラブが発足すると、青年団の活動はこの組織に継承されました。

▲ 一宮町青年会果樹園の一部（戦前の絵葉書）

【問合せ】教育課 ☎(42)1416

平成30年7月号

一宮町の歴史特集
「加納家と一宮」
④加納久宜と一宮町①別荘誘致

かつて一宮地域は「東の大磯」と呼ばれるほどの一大別荘地を築きました。きっかけは明治30年（1897）、両国・一宮間で鉄道が開通し、東京から半日で着くようになったことです。明治34年（1901）に海軍男爵の齋藤實が海岸の船頭給に別荘を建設すると、三井家や各界の名士らが続々と別荘を構えていきます。

この別荘地としての発展には加納久宜が大きく関わっていました。久宜が町長に就任する以前の話ですが、当時の町長・中村祐吉郎に一宮を海水浴場地として発展させる方策を考えさせています。中村は全国の海水浴場を視察し、神奈川県の大磯が一宮と条件が似ていたことから、大磯に倣って財界の大物を呼ぶことを提案します。これを受けてか、久宜は三井八郎次郎を招き、別荘を建ててもらっています（現在の一宮学園の敷地）。なお、三井と久宜はその後も一宮の発展のための協力関係を築いています。

当時の「東京日日新聞」（大正7年7月13日付）の記事では、一宮の海は必ずしも理想的ではないが、それを補うものとして、松林や川、野菜や果実が豊富であるということが記されています。

一時は100軒近い別荘が建ち並んだといいますが、昭和の金融恐慌、戦争の煽りを受けてか、「別荘地・一宮」は次第に衰退していきます。

久宜の人脈と、彼を取り巻く一宮の人々の尽力によって、「東の大磯」は形成され、一宮の発展がもたらされたのです。

▲ 一ノ宮別荘地（戦前の絵葉書）

【問合せ】教育課 ☎(42)1416

【広報文化財コラム「一宮の歴史特集」】⑮

平成30年8月号

一宮町の歴史特集
「加納家と一宮」
⑤加納久宜と一宮婦人会

一宮婦人会は明治43年（1910）、加納久宜夫人の鎰子を会長に発足しました。写真は玉蔵寺での発足式の様子です。鎰子は大正2年（1913）に久宜によって私立一宮女学校が設立されると、講師となり女子教育に尽力してもいます。

婦人会の会員には、裁縫や手芸料理などの講習会が催され、講演会や視察旅行なども年中行事として行われました。鎰子は昭和16年（1941）に婦人会が一度解散される時まで会長として活動しています。

昭和初期、日本には「大日本国防婦人会」「大日本連合婦人会」「愛国婦人会」の3つの団体が存在していました。昭和17年にそれらは「大日本婦人会」に統合され、一宮にもその支部が置かれるという形になり、従来の婦人会は解散となります。

昭和20年、国民義勇隊の結成により大日本婦人会は解散となりますが、直後に終戦を迎えてしまいます。一宮での婦人会は砂鉄採りの奉仕や戦死者の家庭の手伝い、海岸地帯の開墾などに従事したといいます。

戦後、他町村にさきがけ、昭和21年に「一宮町婦人会」の名称で新たに会が発足されます。そして今に至るまで、その活動は続いています。

今も活発な活動を続けいている婦人会のルーツは久宜夫妻の熱意にあり、その精神は今に脈々と受け継がれているのです。

▲ 婦人会発足式
（中央右が加納久宜、左が鎰子夫人）

【問合せ】教育課 ☎(42)1416

平成30年9月号

一宮町の歴史特集
「加納家と一宮」
⑥加納久朗と吉田茂

加納久朗は、戦前は横浜正金銀行（現三菱UFJ銀行の前身の一つ）の銀行員として、戦後は政財界において広く活躍した人物です。そこでの人間関係は多岐にわたり、その詳細は高崎哲郎氏著『国際人・加納久朗の生涯』に書かれています。ここでは吉田茂（1878～1967）との交流を取り上げます。

吉田と久朗の出会いはいつだったのでしょうか。久朗は昭和9年（1934）に横浜正金銀行のロンドン支店長に就任、昭和18年まで務めています。一方、吉田は昭和11年から3年間駐英大使としてロンドンに駐在しており、2人はそこで出会ったとみられます。

彼らがロンドンにいたころは世界的に反日感情が高まっていた時期でした。昭和6年の満州事変、それに起因する同8年の日本の国際連盟脱退、同12年の盧溝橋事件に始まる日中戦争の勃発など…。戦前の緊迫する状況の中で、親英派の2人は日英の連携強化によって日米開戦を回避しようと積極的に活動します。町教委所蔵の「加納家史料」の中には、加納久朗宛の吉田茂書簡が残されています。そこには、戦前の混迷期に戦争を止めようとした2人の姿があります。それぞれが、それぞれの人脈を通して、様々な戦争回避へ向けた動きを見せています。

残念ながら日本は英米と戦争に突入、敗戦を迎えてしまいます。しかしながら、2人は戦後も交流を続けていることが、「加納家史料」から見えてきます。

久朗は「外交」という立場で戦争の最前線で戦っていたのです。

▲ 加納久朗宛吉田茂書簡（「加納家史料」所収、昭和15年か）の一部。中央付近に「加納老台」（久朗）の名前がみえる。

【問合せ】教育課 ☎(42)1416

【広報文化財コラム「一宮の歴史特集」】⑯

平成30年10月号

一宮町の歴史特集
「加納家と一宮」
⑦廃藩置県後の一宮

今年は明治維新から150年の年。NHK大河ドラマ「西郷どん」でも大政奉還や王政復古の大号令がえがかれました。

そののち勃発した旧幕府軍と新政府軍との軍事衝突（戊辰戦争）の際、上総一宮藩藩主の加納久宜は、旧幕府軍側で戦おうとしますが間に合わず、最終的に新政府軍に服属したといいます（異説あり、当初より新政府軍側であったとも）。

戊辰戦争後、明治4年（1871）4月、廃藩置県が行われ、藩は廃され県が置かれます。ここに「一宮県」が誕生します。基本的にはこの時、旧藩の領地がそのまま「県」に変わったのみとなります。そのため、一宮県の範囲には旧一宮藩領の現茨城県南部の一部なども含まれていました。

この年の11月に木更津県（のちに千葉県となる）に合併されてしまうため、一宮県が存在したのはわずか7か月のみ。行政組織については「一宮県歴史」（『千葉縣史料近代篇明治初期』所収）という資料に書かれてはいますが、その実態についてはいまだ不明な点が多いです。

近年、「一宮民政局」の印が押された史料が新たに発見されました。茨城県利根町の「吉浜家文書」に同じ印が押された史料が確認されているため、原史料であることが確定できました。

この資料は一宮県の範囲であった下総国相馬郡羽中村（はなかむら）（現茨城県利根町）に宛てたもので、内容は当時この村に在住していた70歳以上の高齢者を祝うものです。この当時の時代背景を考える上でも大変興味深い内容です。このような内容の資料が残ることも大変珍しいことであり、一宮県の行政実態を知るうえで、貴重な資料といえるでしょう。

▲「一宮民政局」の印
（史料：個人所蔵、町教委寄託）

【問合せ】教育課 ☎(42)1416

平成30年11月号

一宮町の歴史特集
「加納家と一宮」
⑧加納久宜と一宮町政(2)

全国農事会会長、鹿児島県知事時代の農政改革など、農業に大きなかかわりを持っていた加納久宜。「日本農政の父」とも称される久宜は、近年の研究で、生家の立花家の本家・柳川（やながわ）立花家の当主・立花寛治（ともはる）（1857～1929）に対して農業面で様々な助言を行っていた事が分かってきました。

久宜の一宮での農業面での活躍は「耕地整理」です。古代以来、現在の国道付近より東側は湿地帯でした。そのため、明治中期までの人々の生活の中心は漁業を除いては、玉前神社周辺と現在の外房線の線路の西側地域でした。

現在、一宮停車線の両脇には水田が広がり、家も立ち並んでいます。この地域の耕地整理を進めることに一役買ったのが久宜です。

この地域の耕地整理が動き始めたのは明治41年（1908）11月、久宜が町長に就任する年前のことになります。元一宮町長・中村祐吉郎を中心に現在の上総一ノ宮駅の東側約百五十四町五反余（約153万㎡）の耕地整理計画が始まりましたが、周辺住民の反対や「祟り田」の迷信もあり、難航しました。

そこで中村らは久宜を整理組合長に招きます。かつての藩主・殿様ということもあって反対していた人々もしぶしぶ従ったといいます。

その結果、大正3年（1914）3月に耕地整理は終了、総額で17950円（現在の貨幣価値で約6000万円）の費用を投じたといいます。

耕地整理により、一宮は農業面でも飛躍的に発展しました。しかしこの事業には久宜だけでなく、中村元町長を中心とした町民有志の努力があった事を忘れてはいけません。

▲ 役場屋上から見た田園地帯。
この地域の耕地整理に久宜が関わった。

【問合せ】教育課 ☎(42)1416

【広報文化財コラム「一宮の歴史特集」】⑰

平成30年12月号

一宮町の歴史特集
「加納家と一宮」
⑨加納久宜と一宮町政(3)

加納久宜は観光地としての一宮の発展を画策しています、それは名士の別荘の誘致にとどまらず、町の開発にまで及び、海岸に高級旅館を建設することを推進しました。

平成27年（2015）に発見された「旧斎藤家文書」から、その構想を見てみましょう。

写真は明治40年（1907）11月付の久宜直筆の書簡で、宛先は現在の一宮学園の敷地に別荘を有していた三井家の三井八郎次郎です。

この文面の中で、久宜は一宮町には書生宿のような宿しかなく、紳士が泊まれるような旅館はない、そういった人々が泊まれる居心地のいい旅館を作らなくてはならない、と述べています。ちょっと寂しい感じもしますが、藩主・華族としての家柄を持つ久宜の視点として大変興味深いものです。

そして、この書簡の中で注目すべきは、久宜が旅館建設のために三井にお金を貸してほしいと、5000円（現在の貨幣価値で約1600万円）もの出資を依頼していることです。一宮に別荘をもった名士と一宮の関係を示す貴重な記述です。

高級旅館の建設予定地は海岸の松林、久宜邸（一宮館の隣接地）の隣としています。残念ながら、書簡によれば図面を添付する、とあるのですが、図面は残されていないため、どんな旅館を建てようとしたのかは不明です。

結局、この計画がどこまで実現したのかは資料が残されていないため、はっきりとしたことはわかりません。しかしながら、久宜が様々な視点から、一宮の発展を目指していたことを物語る、貴重な資料であることに変わりはありません。

▲ 三井宛加納久宜書簡の末尾（「旧斎藤家文書」、中央付近に「加納久宜」、宛先の「三井尊台」がみえる。

【問合せ】教育課 ☎(42)1416

平成31年1月号

一宮町の歴史特集
「加納家と一宮」
⑩加納久徵（ひさあきら）と一宮

一宮藩第2代藩主・加納久徵（1813～64）については広報2月号で紹介した通りですが、彼が一宮に「形」として残したものを少しご紹介しましょう。

1 萌黄縅胴丸（もえぎおどしどうまる）（町指定、玉前神社所蔵）

平安末期の武将・上総広常（かずさひろつね）が源頼朝の武運長久を願って甲冑を玉前神社に奉納したという故事から、久徵が奉納した甲冑です。かつて戦乱で玉前神社が炎上した際に、広常が奉納した甲冑も失われたことを嘆いた久徵が奉納したといいます。

2 高藤山城古蹟（たかとうざんじょうこせき）の碑（町指定）

上総広常の居館伝承が残っていたこの城跡に石碑を建立したのも久徵です。おそらく、彼が石碑を建立していなければ、この伝承は忘れ去られていたことでしょう。

3 洞庭湖（記念碑は町指定）**・市兵衛堀**

洞庭湖は灌漑（かんがい）用に久徵によって作られた貯水池で、天保15年（1844）に記念碑が建立されました。市兵衛堀は加納家家臣の岩堀市兵衛に因んで名づけられた水路で、天保年間に洞庭湖から町内へ向かって作られました。

このように見ていくと、久徵は郷土の歴史に大変造詣があり、かつ領内の治世に尽力した人物といえます。彼の功績は今の私たちに「遺産」として残され、語り継がれているのです。

▲ 春の洞庭湖の風景（撮影：秘書広報課）

【問合せ】教育課 ☎(42)1416

【広報文化財コラム「一宮の歴史特集」】⑱

平成31年2月号

一宮町の歴史特集
「加納家と一宮」
⑪加納久宜といふ人

今年の大河ドラマ「いだてん」ではオリンピックがテーマですが、第1話で日本体育会（日本体育大学の前身）会長として加納久宜が登場しました。今回のコラムでは、久宜がつとめた主な役職について列記してみましょう（文字数が多くなるため、西暦で標記します）。

・一宮藩主（1867～69）
・一宮藩知事（1869～71）
・岩手師範学校初代校長（1877～79）
・新潟学校校長（1879～81）
・熊谷裁判所判事（1881）
・大審院検事（1882～?）
・貴族院議員（1890～1919）
・鹿児島県知事（1894～1900）
・全国農事会幹事（1900～02）、幹事長（1902～10）
・日本体育会会長（1904?～?）
・荏原中学校校長（1904～?）
・東京競馬会会長（1906～?）
・大森倶楽部委員長（1908～09）
・帝国農会初代会長（1910～12）
・産業組合中央会副会頭（1910～?）
・東京競馬倶楽部初代会長（1910～?）
・一宮町長、一宮町信用組合長、一宮町農会長（1912～17）
・日本赤十字社幹事（?～?）

政界・法曹界・教育界・農業界など多種多様な分野で活躍したことがわかります。

久宜は大正8年（1919）2月26日、療養先の大分県別府の麻生家別邸にて数え72歳で亡くなりました。今年没後100年を迎えます。

私たちの町・一宮にこのような偉人がいたことを忘れずに、後世へ伝えていかなくてはなりません。

▲ 絵葉書「故加納子爵閣下　肖像ト其ノ筆跡」（町教委所蔵）

【問合せ】教育課 ☎(42)1416

一宮町の歴史特集
「加納家と一宮」
⑫「いだてん」から考える 加納久宜

今年度連載してきた「加納家と一宮」の最終回の今回は、NHK大河ドラマ「いだてん」と加納久宜について見ていきましょう。

現在放送中のNHK大河ドラマ「いだてん」は日本とオリンピックがテーマの物語で、第1章として、始めて日本人としてオリンピック（ストックホルム、明治45年・1912）に参加した金栗四三（1891～1983、マラソン）が取り上げられています。

そのオリンピック出場をめぐって、出場を目指す嘉納治五郎（1860～1938）に反対する、日本体育会（現日本体育大学）会長として久宜が登場します。

久宜とスポーツ（体育）については文献が少ないですが、ここでは限られた情報から見ていきます。

久宜の体育活動とのかかわりは、廃藩置県後に大学南校（後の東京開成学校、東京大学の前身）にて、体育的施策を学んだことに始まるようです。

明治10年（1877）、久宜が岩手師範学校校長に着任すると、様々な教育改革に臨みます。その中で、久宜は座学だけでなく、体を動かすことが大切であると考え、雨の日でも運動ができるように、室内運動場（いわゆる体育館）を校内に建設しました。この試みは全国的な先駆けとなったようで、この後久宜が自らの著書の中で体育館の設置を提言すると、全国的に体育館が設置されるようになったといいます。また、「体操」科、「体操術」科といった科目を設置し、自ら指導にあたりました。

そして明治34年（1901）に日本体育会の会長に就任しました。明治37年（1904）には体育教員を養成する実習校として、荏原中学校（現日本体育大学荏原高等学校の前身）を設立、初代校長として当時の最先端の洋式体育教育の普及に努めました。

▲ 岩手県師範学校『東宮行啓記念写真帖』(1908)
国立国会図書館デジタルアーカイブより

「いだてん」の中では対立する組織の長として、敵役のように描かれていますが、このように見ていくと、必ずしも、体育に否定的であったわけではないことが分かるのではないでしょうか。二人の「カノウ」（加納・嘉納）はオリンピックに対する認識こそ違えど、日本を体育・スポーツの面で発展させたいという志は同じだったはずです。おそらく「学校教育」の中に位置付けられ始めたばかりの体育を、世界に発信するには時期尚早である、というのが久宜の思いだったのではないでしょうか。

ちなみに、久宜は治五郎にオリンピックを打診された際、日本体育会は財政的に厳しく、そのような大事業はできないので、自分たちでやってくれ、

▲ 日本体育会発祥の地石碑
(東京都新宿区原町３丁目)

▲ 日本体育会体操学校の跡
(東京都千代田区九段南 1-6-11)

【広報文化財コラム「一宮の歴史特集」】⑳

平成31年3月号

と発言したといいます。本音は、果たしてどうだったのでしょうか。

さて、これまで12回にわたり、加納家と一宮について連載をしてきました。最後に没後100年ということで久宜について、私の雑感を記して終わりたいと思います。

久宜という人物は多方面において、様々な功績を残してきたことはこれまで記してきた通りです。彼の考え、根底にあった理念は何だったのかと考えたとき、それは「富国」と明治天皇への敬意だったのではないかと思います。明治天皇への敬意というのは、自伝をみても読み取れますし、鹿児島県知事時代の学校の御真影にまつわる処罰であるとか、国に先行して一宮において明治節（明治天皇の天長節を公休日とすること）を導入したらしいことからもわかります。国家に対する強い意識というものがその根底にあったように思われます。

そして重要なことは富国を目指すうえで、久宜が「国政」という立場ではなく、あくまでも地域から盛り上げていこうとした点にあるのではないでしょうか。欧米に倣った最先端の文化や技術を導入し、富国を地域から興していった、まさに「地方創生」の先駆けが久宜だったように思えます。

久宜が、没後100年のこの年に大河ドラマに登場する、そして来年一宮にオリンピックが来る、というのはなにか運命的なものを感じます。皆さん、この機会にぜひ「加納さん」のこと、一宮の郷土の歴史に触れてみてはいかがでしょうか。

（文責：町学芸員　江澤一樹）

（歴史特集「加納家と一宮」終了、次回以降は「ゆかりの人々」「文化財」を紹介します）

【問合せ】 教育課　☎(42)1416